
キラキラ

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラキラ

【Zコード】

N8724C

【作者名】

日向葵

【あらすじ】

卒業する日、それは沙代にとっても特別な日。最後だから勇気を出そう。片思いの女の子の小さな決心をどうぞ見守って下さい。

まぶしかつた。

白いシャツも。

汗も。

光に透ける茶色い髪も。

いつも、いつでも、どこにいたってキラキラしてた。

沙代はこいつぞうと溜息をついた。

そのキラキラに惹かれているのに、触れてみたいのに、まぶしそぎて近づけない。

この三年間、沙代はずつと見てきた。その光を見つめ続けてきた。
それも今日が最後…。

沙代はそっと目を伏せ、周りの様子を伺った。

門出を祝うかのような澄みきった空の色の下で、制服を着た若者たちが、あるものは楽しげに、あるものは涙を浮かべて、それぞれ友と想い思いのときを過ぎじていた。

そして、ある一点で彼女の視線は動きを止めた。

長身の背を少しかがめるようにして、桜の木の陰にたたずんでいる一人の青年。

間違いなく、沙代が探していた人物だった。薄茶色の髪を風になびかせて、ポケットに手をつつこんで立っている。

(最後だから)

沙代はぎゅっと両手に力をいれる。

見つめつけたこの三年間、彼との関係はクラスメイトでしかなかった。

特に友達ではないし、携帯番号を教えたたりするほどの仲でもない。相手が名前を覚えてくれているかもあやしかった。

沙代もそれ以上を望んだわけではない。

ただ、どういうわけか彼だけが沙代には輝いて見えるのだ。それがどうしたことなのか、沙代にはわからなかつた。

ほんと、何もなかつた。

ううん、何もしなかつたよね、私は…。

そつ心でつぶやくと、沙代はそつと苦笑した。

だから、今日くらいは、ね。

そして胸に手をあて深呼吸をひとつし、ありつたけの力をこめて名前を呼んだ。

「春田井　――」

言わなきや いけない」とだが、あるんです。

最後に。

あなたへ。

相手もいきなり名前を呼ばれてびっくりしたようだ。

しかも呼んだのはそう仲がよかつたとは思えないクラスメイト。

なんだろうと首をかしげて、彼女が走ってくるのをじっと見つめた。

息を切らしている彼女の顔を見ながら、春田井は必死に名前を頭の隅から呼び起こす。

確か山がついたよな？　山田？　山本？　ああそりだ、確か彼女の名
は……。

「どうしたの？　山口さん。俺になんか用？」

耳元でちゅつきり切られた栗色の柔らかそうな髪が揺れ、驚いたように顔をあげた。

「私の名前、知つてたの？」

田がまんまる…。

思わず春日井は笑つた。

「三年間も一緒にいたクラスメイトにそれはないでしょ？」

沙代はクラスでも特に田立つ存在ではなかつた。
容姿も成績も人並み。

それでも友達が多くて、よく仲間に頼られていたことを春日井は知
つていたし、
くわくくる表情の変わる子だなとも思つていた。

ちよつと嬉しそうな顔を見せたあと、沙代は尋ねた。

「友達のとこ行かないの？」

彼女はいつもつるんでいた吉沢たちのことについているのだ。ひい。

そう解釈すると春日井は笑つていつた。

「うん、ちよつとね…。」

「あっち行くと、後輩がほつとかないから面倒なんでしょう？」

いきなり図星なことを言われて、春日井はとまどつた。沙代はそれを見て、やつぱりねとクスクス笑つた。

それは本当だつた。

卒業式恒例となつてゐる第一ボタン争奪戦がどうにもめんどくさくて、こんな目立たないところにぽつんと立つていたのである。

春日井は、そのすらりとした身長と端正な顔立ちから学年でも有名な人物だつた。

そんな人物だからこそ、こんな特別行事の日は一大事だつた。きっとあつという間に囮まれてしまつて、もみくちゃにされてしまうだらう。

そんなことは彼にとつてまつぶらじめんだったのだ。

「そんなことは、いいんだけどね。」

沙代はふわりと笑つた。

様子が変わつた沙代の様子に、春日井は黙つた。

二人の間を風が舞い、桜の花びらが舞い散る。

「飯野さん、待つてゐる。」

「えつ？」

唐突に出てきた名前に、春日井は聞き間違えかと思つた。

しかし、沙代の口からもつ一度しつかりとその名前はつむがれる。

「飯野さん、春田井の」と待つてゐる。今なら聞こゆるよ。」

(なんで、彼女がそのことを?)

そんな疑問を見透かしたかのように沙代はこいつ微笑んだ。

「ずっと、見てたから。」

「…。」

「彼女、校門のところで友達と喋つてゐる。早くこつてあげて。」

ぎゅっと口を結んで黙つたまま、春田井は動かない。
どうするべきかを、考えてゐるのだろう。

(答えはひとつなのに、ね。)

沙代はその答えを知つていた。

だからこそ、彼を行かせようと思つた。

最後だから、もう彼に会つのは最後だから、彼のためにしてあげよう。

そう思つたのだ。

(じょうがないな。)

困ったように肩をすくめて沙代は強硬手段にでた。

「ほーら。」

初めて触れる彼の体温。

上ずりそうになる声を押し殺して、春日井の背中を両手で前に力強く押した。

「行つてこい」

不意をつかれて少しよろけた春日井は、体勢を整えるとためらいついに立ちあがりを見た。

沙代はとまどいを含んだ彼の瞳を見て、ニヒリと笑つてやる。

(大丈夫だよ。)

春日井はゆっくりと頷くと、そのまままっすぐ前へと向きを変えた。

(・えう、それでいいんだよ。)

沙代は彼の未来がうまくいくように祈った。
後悔はない。

むじゅうじゅうが清々しい気持ちで、ぐんぐん前へと進む力強い背中を見やつた。

(バイバイ、春日井)

そして、今度は自分の道へ進もうとした、そのとき。

「ユローーー、名前ななんこいつのーーー?」

言われたことの意味がわからず、沙代はじょろくへりへりとことした。

「お前だよ、お前の下の名前ーーー」

遠くから聞ふその声は、びっくりするほどのせつと聞こえた。

(あたしの名前?)

沙代はおかしくなつて笑つた。

(わつわつ、名前覚えてるつて言つてたじさん)

「沙代。ユロ沙代ーーー。」

沙代のありつたけの声は相手にも届いたようだ。

そして、春日井はにやつと笑うと、大きく右手を振り上げて走つていった。

次なんてあるはずない。

わかつてゐ」とけど、どうしてこんなに嬉しいんだろう。

(- 困つたなあ)

ひらひらと舞つ桜の花ひらをまぶしげに見つめ、沙代は目を細めた。

(後書き)

片思いのお話を書きたくて少しづつ暖めて出来た作品です。
稚拙な文章ですが、ご容赦下さい…ヒヤヒヤ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8724c/>

キラキラ

2010年10月21日23時34分発行